

# 日本記者クラブ会報

## 創立十周年を迎えて

理事長 酒 井 新 二

新年おめでとうございます。昨年五月、渡辺前理事長から引きついで

以来早くも八か月がたちました。会員の皆さんのご協力によってクラブの運営は概ね順調にいつております。心から感謝申し上げます。

今年にはクラブ創立十周年の記念すべき年に当たります。草創期の諸先輩の大きな努力によって、クラブはこの十年の間に順調な発展を遂げ、懸案のプレスセンタービルの建設も完成し、会員も千五百人を越えて、名実ともに堂々たるナショナル・プレスクラブに成長しつつあります。今年はこの十年の節目を記念して次のような事業を企画しております。①記念講演 ②日本記者クラブ

「十年の歩み」の刊行 ③記念パーティ。

第一の記念講演は現在企画委員会を中心に検討されていますが、アジアの著名ジャーナリストの参加も得て、一九八〇年代を迎える日本と世界のジャーナリズムの課題を考える機会にしたい、と考えています。

第二の企画は、いわば日本記者クラブ史の編さんであり、今後二十年、三十年と引きつがれるものの一歩であります。クラブ創立時の事情をしっかりと記録に留めることによって、日本記者クラブ創設の精神、その原点を明らかにしておかねばならない、と考えます。

私は理事長就任に際して、今後の

第107号  
1979年  
1月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F 電話100  
社団法人 日本記者クラブ 発行  
電話五〇三二七二二(代)

クラブの課題としてワーキング・プレスの積極的参加ということを目指しました。この課題はなお十分の成果を上げておりませんが、今年もこの目的の実現に出来るだけの努力を傾けたい、と考えております。この問題は言うは易く行うは難しといった性質のものでありますので、会員の皆さんの建設的なアドバイスを是非いただきたい、と考えます。

昨年も内外の重要人物をクラブに迎えて多くの有意義な記者会見、昼食会、シリーズ研究会が行われました。外国からは鄧小平中国副総理、シュミット西独首相、ラーマン・バングラデシュ大統領、バジパイ・インド外相、イエン・サリ・カンボジア副首相、マクナマラ世銀総裁、ガールブレイス・ハーバード大名誉教授らがクラブのゲストとなりました。中でも鄧小平副総理の会見は四百名を越す内外記者を集め、世界で初めて中国の指導者を公開の記者会見

に引き出すことに成功しました。日本の産業構造を多面的視点から検討したシリーズ研究会も好評で、近く当クラブ編集第一号として刊行される予定であります。

日本の報道界は昨年も波乱に富んだ一年を過しました。今年も多くの問題が待ち構えているに違いありません。日本社会の環境は自由なプレスにとっては恵まれたものだといえるでしょう。しかし恵まれ過ぎた環境は必ずしもよきプレスを生むとは限りません。困難に対処し、それと闘い、それを克服することによって真に鍛えられたジャーナリズム、ジャーナリストが生まれることも事実です。日本記者クラブがこのように現代のジャーナリズムの成長にながしかの貢献を果たせるよう、皆さんのご支援を心から期待しております。

法人会員	一四二社
基本会員	六一二人
個人会員	七五〇人
法人・個人賛助会員	三八社
特別賛助会員	一一一人
名誉会員	四七人
計	一八〇社、一、五二七人

## 新春随想

## 『帝国大学新聞』のころ

殿木圭一

まり現役の新聞記者たちの話に耳を傾けることが多かった。

もともとは新聞にあこがれて高校で新聞を始めた私ではあったが、そのころの若い新聞記者の気炎を聞いて、なんて新聞記者というものは楽しいものであるのか、ということをつくづく感じ入ったものであった。岡部一郎(朝日)水野可寛(東日)福林正之(報知)小島文夫(読売)大塚虎雄(東日)などそのころの大学新聞OBはもうこの世を去っている。

ところが大学新聞の編集部にはいつてみると、仕事は必ずしも楽ではない。大学の講義は好きなものには出て、きらいなものを出なければいし、教室では居眠りをしていてもいいのだが、大学新聞の取材ともなると、好きな人にだけ会って、きらいな人には会わないというわけにはいかない。こちらは学生であるが、あちらは教授か事務長か、いずれにせよ一段とへりくだって対応しなくてはならない苦手ばかりである。

記者クラブなんてものはないから、一対一でぶつからなくてはならない。せつかくりまく取材したと思つて帰つて来たのに、かんじんな点が抜けているではないかといわれ、もう一度足を運ぶときの足の重さ。それがいやで脱落した人もある。それを我慢して、三年の

春秋二回、日本記者クラブの会議室を借りて、銀杏クラブの会合が開かれる。

かつては学士会で開かれたこともあり、朝日ビルのアラスカで続けられたこともある。その後、場所を東大の山上御殿に移したが、プレスセンターが出来てからは、ここを例会場になっている。

少くとも三十人ぐらい、多いときには四、五十人になる。出席者は定年を過ぎた高年齢層が多いが、学生も何人かまじっている。中年の会員も多いのだが、高年齢層の出席者が幅をきかすので、若い人たちが出にくいのではないか、という反省もある。

銀杏クラブはかつて東京大学新聞の編集にたずさわった人達の親睦機関である。東京大学新聞という名前になったのは戦後のことで、戦前は帝国大学新聞であった。

日本で一番古い大学新聞は慶応の三田新聞で、一九一七年の創刊、東洋創始の

大学新聞であり、帝国大学新聞はこれに次ぐ一九二〇年の創刊である。歴史的には、日本大学新聞、早稲田大学新聞、明治大学駿台新報の発刊がこれに続く。

## 震災後、週刊の発行体制

帝国大学新聞は関東大震災後の一九二四年には週刊の発行体制を確立したが、戦時中は一般新聞なみの新聞統合で、全国の大学新聞を統合した「大学新聞」となった。

戦後いち早く帝国大学新聞に復帰、間もなく帝国の壊滅によって東京大学新聞となったが、GHQの指示で新聞出版用紙割当の削減にあい一たんは解散した。

経験を積んだだけでもたいした勉強であったともいえる。

しかもそれによって大学のいろんな学部の教授にも知己を得、いろんな学問の領域の知識をおぼろげながらも身につけたということは、あとになって思わぬ役に立っているかもしれない。

### 土曜メ切り、日曜大組み

土曜の晩がメ切りであり、日曜が大組みであった。土曜の仕事が終るのは大学の門が閉まつてのちのことであり、正門を乗り越えて帰るのがいつものことであった。日曜は朝から朝日の工場で一日を送った。

夏休みを除いては日曜の休みはなかった。その夏休みも二か月休んでは第三種郵便物の認可を取り消されるとあって、中間に銷夏特集号を発行しなくてはならなかった。

よく読まれたので張り合いがあったというところもできる。学生は七千ぐらいしかいなかったが、発行部数は段々とふえて六万に及んだ。東大OB、東大を目指す高校生や他大学の学生にも読者層を拡大した。ページ数も、私のはいった時は六ページであったのが、八ページとな

り、十ページとなり、さらに十二ページにもなった。

たかが学生というなかれ。振り返ってみれば、一応まとまった紙面をつくっているのである。週刊とはいえ結構ニュースもあつたから、ある社の文部省担当記者は、毎週発売日の月曜の朝には編集部に現われて、大学新聞の中からニュースを拾い、それはいつも何段かの記事になって、その新聞の紙面をかざっていた。

ニュース以外の面は、論文、書評、文芸、科学、スポーツなどの欄があつた。人文社会系の教授はほとんどすべて筆をとり、自然科学系の教授も、筆の立つ人は随筆などを書いた。

美濃部達吉さんや大内兵衛さんの論文がのつたときなどは、まとまった部数の追加注文があつた。旧臘読売の夕刊にのつた横田喜三郎さんの自伝「法律と共に六十年」が満州事変後の大学新聞に書いた論文に筆を起しているのはまことに印象的であつた。

### 卒業後は新聞記者に

とにかく大学の門をくぐると教室を横目に大学新聞社に出動し、たまに教室に出ることがあつても大学新聞に戻り、編

集の合い間にはキャッチボールをしたり麻雀をしたりした。銀座や浅草に出掛けるとしても大学新聞の仲間といっしょであつた。

それがいつしか大学を出ると、若干の例外を除いてはみんな新聞記者になって巣立って行った。不景気はいまとはくらべものにならないくらい深刻であつた。「大学を出たけれど」という映画が時代色を背景に登場し、大学新聞はそれを題材にして連載読み物を書く時代であつた。

それなのに新聞をやりたくて大学新聞に入り、大学新聞を卒業して新聞記者になりたい連中は、大学の成績のいかにかわからず、ほとんどがどこかの新聞にその職を得て行ったのである。不思議といえば不思議といえないこともない。

ちなみに私と同時代の人達を挙げれば、熊木啓作（電通）末松満（大朝）増田寿郎（聯合→東朝）松浦年三郎（東日）山田正男（東朝）梅津八重蔵（読売）故人）以上が昭和六年卒。有賀博（都）殿木圭一（聯合）平岡敏男（東日）三堀将（読売）以上が昭和七年卒。赤井直恭（東朝）高原四郎（聯合→東日）南部農夫治（都）以上が昭和八年卒である。

大学新聞の編集をやりたいという希望者は年々ふえて行った。私などは表口でも裏口でもない、通用口からは入り込ん

で、そのまま居坐ったかたちであつたが、その後は倍率の高い入社試験をやつたりしている。

石神清（東日）椎野力、久門英夫、泉毅一、大島昭、扇谷正造（以上いずれも朝日）などはおそらくそういつた入社試験をパスして大学新聞の編集に参加した人たちである。

### 戦後は荒廃の道を歩む

そのころのメンバーの中には「暮しの手帖」を育てあげた花森安治、「図書新聞」に生涯を捧げた田所太郎、作家としての途を歩んだ田宮虎彦、杉浦民平などもある。財界に入った日本合成ゴム社長勝本信之助が随筆集「千紫万紅」を書いたり、三菱商事から日本リースに進んだ宮本泰が東京の電話帳にも匹敵するような膨大な句集を出すなど、雀百までの感なしとしない。

戦時中の反動で、戦後の大学は荒れに荒れた。多くの大学では大学新聞は復刊したもの、環境は必ずしもわれにくみせず、自由と平和を満喫していいはずの戦後の大学新聞はグッド・オールド・デイズを復元していかない。新聞記者の苗床としての役割も大きく後退したのである。

一九七八年十月九日

J・ケネス・ガルブレイス教授

## 「不確実性の時代」を語る

私は、報道関係のみなさんたちが、いろいろ悩んでおられるような諸問題における不安定さについて、何ら解決をもたらすことのできるものはありません。もし、だれかがそれを簡単にできるならばみなさんも私も失業してしまうでしょう。

われわれは確かに不安定な時代に生きていると思います。しかし、それを必ずしも悪いこととは思いません。今世紀に比較してみますと、前世紀にはいろいろ確かであると思われたことがあります。いろいろな産業国、また産業化しつつある国々は、それなりの安定を信じていました。また、社会主義者が代替案をつくるなどとは思わない、といった堅固な考え方が存在していました。支配階級というものが、それが変化することはないのだ、というような確信もありました。しかし、いまやこうした安定感(Certainty)はすべて消え去ってしまったわけです。

そして今日、多くの不安が存在するわけです。しかし、私は、必ずしもそれらのすべてを残念だと思ふ必要はない、と考えます。

今日、新聞やテレビで読んだり聞いたりする不安のうちで、一番中心的な不安は何であろうか。それは産業諸国間に存在する大きな不安定な関係です。この中にはもちろん為替レート不安定性といったことも含まれます。こうした不安定が起こったのは、諸国間の関係がきわめて予測困難だったからです。かつまた貿易問題にうまく対応できなかったからです。

この問題を考える前提として、われわれが銘記しておかなければならないことがあります。ひとつはいうまでもないことですが、現在、人類の歴史上みたこともないほどの巨大量の貿易が行われており、全体の基調が不安であるにもかかわらず、それに耐えて貿易が発展しつづけている、という事実です。

第二に、これはより重要なことですが、この一世紀のあいだ、なかならず今世紀の初頭、少なくとも第二次大戦に至るまでの期間において、諸国間の貿易関係はきわめて安定していた、ということですが、もちろん、通貨の面においてもたいへんな不安定があったわけです。

世界のいろいろな国々が、それぞれの国内において不安定をあえて許容するという代償を払うことによつて、こうした安定を勝ち得ていたのです。ドルやマルクや円やポンドを守るために、関係諸国の政府は大規模な失業を容認し、価格の低下やストライキ等による国内のある程度の混乱すら受容したわけです。これらの代償により対外的な安定を確保してきたのです。

たぐさんの実例があります。

たとえば、一九二五年にイギリスは国際的な約束を守るため、ポンドをそれ以前の古いペリティの、四・八五に戻したわけです。その結果、石炭ストは一年も続きましたし、また炭坑夫を支援するためのゼネス

トも行われました。そして英国は長期間、四、五年にもわたって失業を甘んじて受容したわけです。これが、イギリスが対外的安定を確保するために支払った代償でありました。

しかしながらこの三〇年のあいだ、多くの産業諸国はむしろ国内安定を優先させる政策をとりました。その結果として、対外的な安定を犠牲にしまったわけです。こういった態度の変化が今日の対外的不安定の原因となっています。

われわれはいま次のことを自問すべきです。一九三〇年の大不況のときのような苦しみをもう一度味わつてよいのだろうか。まだ産業国家として若かった日本経済が三〇年代に受けた大きな圧力のようなものを再び許容してよいのだろうか。国内安定確保のためには本当に貿易および通貨面で対外的に不安定になつてよいのかどうか。

今日の国際関係においては実際、われわれが必要としている以上の不安が存在しています。かつてチャールは一人外へ出たら自国を批判するべきでないが、国内にいるときは決して批判をやめてはならない、といいました。しかし、あえて私は、アメリカが実はこの不安にたいへん貢献している、ということをここで批判したいと思えます。この貢献は国際関係に大きな危険をもたらすものです。

ワシントンにいる多くの同僚であるエコノミストたちには悪いのですが、昨年からアメリカ自身が犯した間違いをドイツ及び日本にも犯すように求め、それによつて安定を確保するように呼びかけたのです。

今日のように強大な労働組合と大企業、また農業組織などが存在する状態における、新しい形のインフレ

には従来の経済政策は充分な調節機能を果たせない、  
と思います。

現在では競争的な圧力により価格がつねに上昇して  
しまっています。この形のインフレこそ、今日、若い  
世代のエコノミスト、特にアメリカのエコノミストが  
なかなか対応策を見出せずにいるのです。

この新しいインフレに対応するには、成熟した工業  
国、なかならずアメリカの場合は何といても所得イ  
ンフレが物価に与える影響について直接取り組む以外  
に対策はありません。

これが真実であるにもかかわらず、実際には、アメ  
リカでは大企業がこの問題をはつきり受け入れること  
に難色を示しています。アメリカにはあまりにも経済  
学という神話を信じているエコノミストが多過ぎるこ  
とが、その原因です。要するにエコノミストが多過ぎ  
るのです。

しかし、われわれにとって一番よい教師というのは  
状況 (Circumstance) の力であるということに強  
調したいと思います。カーター大統領のエコノミスト  
たちがワシントン入りしたとき、かれらは、神様とい  
うのは、リベラル・デモクラットである、という信  
念を持っていました。

念のために申し上げますが、私のいうリベラル・  
デモクラットとは、日本語での自由民主党とはちょ  
っと違う意味であります。(笑)

そのエコノミストたちが、いま実際にワシントン  
で、賃金および物価に対する直接介入でたいへんな苦  
労をしているわけです。

何かしなければならぬという意識が、アメリカで  
は非常に高まっています。なかならず石油輸入がどん

どんふえていて、ということに対しては何らかの規制  
をしなければならぬ、という意識が強まっています。  
私の古い同僚であるハーバードのシュレジンジャー氏  
が主張している政策が必ずとり入れられるだろうと思  
います。そしてドルは安定化の方向に向かうでしょう。  
米国と他の貿易相手国との関係もより緩和されたもの  
になっていく、と思います。私は悲観主義者ではあり  
ません。

こうした教訓が、もしガルブレイス教授が教えてく  
れたものだとするなら、私も悲観的にならざるをえな  
いのですが、幸いこの教訓は別のところからきていま  
す。それは、きわめて厳しい現実とはかに代替策がな  
い、という事実が教えているものです。

このふたつは、われわれにとってすばらしい教師で  
す。いわばこの教師が、われわれに対してもつとはっ  
きりとわれわれが満足することができるような方向  
へ、経済政策を切り換えていくことを強要している、  
といってよいでしょう。

#### 質疑 応答

坂本 (NHK) 前世紀の終わりから今世紀の初  
め、第二次大戦までのあいだの各国の国内状態と国際  
状態をお話になったときに、主な工業国は国内不安を  
持ちながら、対外的なスタビリティを維持してきた  
ということでしたが、その場合、第一次大戦の原因は  
どういうようにご説明になるのでしょうか。私は、第  
一次大戦はむしろいろいろなドメスティック・インス  
タビリティの結果がエクスターナル・インスタビリ  
ティーになったのではないかと思うのですが。

ガルブレイス 私、経済の学説については非常に

頑固な意見を持っているのですが、あなたほどのは  
つきりした頑固主義者ではありません。

第一次世界大戦は経済的な出来事から起こったとい  
うよりは、古いヨーロッパの封建主義的秩序、階級の  
崩壊と、それに伴って生じた不安要因から起こったも  
のである、と考えます。そして、ある程度の原因は、  
ロイド・ジョージが言ったきわめて賢明なコメントの  
中にあります。「無知な者」——実際には、かれはそ  
ういう言葉を使わず、「世界は」を用いました。「世  
界はその中につまづいてそういう状態になった」とい  
いました。——そこに原因が存在すると思います。

第二次世界大戦はより強くそういう要因から起こ  
ったと考えます。

イタリヤ、ドイツ等における民主主義体制があまり  
にも弱かったために、国内的に大きな緊張が生  
まれ、失業やデフレが生まれ、農村はたいへんな窮乏  
状態に押しやられたわけでありました。こうした状態は  
、まだ年若い民主主義的構造にはとても耐えられない  
ような強い圧力だったわけです。

ジェームズ (ロサンゼルス・タイムズ) アメリ  
カが日本と西ドイツに対して、自分たちが間違っ  
たことをまねしることを強要している、という趣旨の話  
がありました。それは、国内経済をもっと拡大せよ、  
ということを指しているのでしょうか。そうだとすれ  
ば、ほかに何か手はあるのだろうか。

ガルブレイス それ以外のやり方があると思いま  
す。たとえば、西ドイツは外国人を自分たちの雇用の  
うち一〇%という規模で受け入れています。西ドイツ  
や日本の成長率は、アメリカにとって充分受け入れら  
れるものです。私は、西ドイツや日本に対して、アメ

リカのインフレを楽にするために、それぞれの国の国内経済を拡大すべきだ、というようなアドバイスはいけません。

清水(サンケイ) 円の対外的なペリヤーが急速に高くなっているわけですが、その国内的な、いわゆる購買力で比較しますと、円は非常に弱いわけです。先ほど政府が国内的不安定といったものを避けるために、対外的な混乱を許容した、という説明があったわけですが、日本の場合はどうなのでしょう。

ガルブレイス 前提の理解が多少違うようです。それはともかく現に円の対外価値が非常に高まっています。そして、この円高はふたつのことからきている、と私は考えています。

まず第一には、日本の国際収支、特に石油に関する限り情勢はたいへんよくおさまってきている、と思います。アメリカの場合、石油に関しての国際収支問題が解決していません。石油輸入のための支出が、日本の場合は国際収支上問題がなく、アメリカの場合は依然として問題だ、ということですが。

もうひとつの問題は、アメリカの物価水準が依然としてどうにも手をつけられないほど、非常に高いペースで上がっている、ということですが。そのため、日本からの輸出品にとってアメリカがだんだんに魅力的なものになってきた、という事情があるわけです。

これに対する対策としては、私が前からいっているように、アメリカは石油の輸入を抑えるよりしかたがない、ということですが。それによってはじめて国内的な物価の安定ができる、ということになるわけです。

円の対外的な力、円の持っている力というものは、いわばこうした情勢を鏡として反映したものにすぎない、

い、と思います。

今(個人) ちょっと情緒的な質問なのですが、日本に来て、日本が不況だと思いますか。それともたいへん好況だと思いますか。

ガルブレイス たえほんのちょっとと東京に立ち寄った私のようなビジターであっても、日本が深刻な不況にあるとは信じがたい。

今日の若い世代、つまり、われわれより若い年代、そしてわれわれより幸運な世代の人たちは、とかくクライシス(危機)という言葉を使っている傾向がある、と思います。確かに今日、いろいろな大きな問題がありますが、それは決してかつて一九三〇年の大不況の時に世界が直面したような深刻なものではありません。

当時、一九三三年には、アメリカの労働人口の二五%が失業しておりました。七、〇〇〇から八、〇〇〇の銀行が倒産し、何十万という小企業が倒産しました。電力等の公益事業や鉄道等もたいへんな困難をこうむりましたし、農民の資産よりはその借金のほうがはるかに多かったわけです。そのとき日本でも、アメリカほどではなかったわけですが、やはり不況は存在していたわけです。しかし、西ドイツはアメリカとほぼ同じ程度に具合が悪かったわけです。イギリスも相当悪かったのですが、かれらはそれ以前からあまりにも長く不況を経験していたので、すっかり慣れっ子になっており、それほどひどさを感じなかったのだと思います。

いずれにしても今日の世界が直面している不安は、あの一九三〇年の大不況の規模、程度と比べますと、問題になりません。

山崎(NHK) ガルブレイス夫人が近く中国へい

らっしゃる、という話ですが、博士自身が中国へいらつしやる予定は？ また、現在の中国をどのように評価しているか。関連して将来の米中関係はどういう方向に進むと考えるか。

ガルブレイス いますぐ中国を訪問する計画は持っておりません。

五、六年前のことですが、当時、私の前任者としてアメリカ経済学協会の会長をつとめた他の二人とともに、中国から招待を受けました。『中国経済の旅』——同僚はそういうふうと呼んでおりました——は私にとって学ぶことの多いものでした。

私自身はこれまで長いこと、二つの巨大な共産国家とのあいだにより緩和された関係があるべきである、ということの主唱してまいりました。事実、ジョージ・ケナン、ドナルド・ケンドール両氏とともに、私は東西関係緩和のための委員会に席を置いています。この委員会はソ連と中国とのあいだの貿易関係を発展させ、もっと両国を関係させようという運動を推進しています。また、SALT IIの推進も支持しています。

私の感じでは、いまアメリカと中国との関係はある程度幅広く、そしてかつはつきり改善されつつあると思います。外交政策の遂行に当たって、米国がいわば中華人民共和国とソビエト連邦とのあいだの緊張を利用するというようなゲームをやらなければならない、というところは私は切望しています。外交上のゲーム・プランは避けるべきです。

ついでにソ連について一言触れたいと思いますが、みなさんすでにご承知のように、経済体制というものは、その違いがだんだん少なくなってきた収れんしつつある、という考えを私は前から述べています。お

よそ大規模な組織というものは、たとえば鉄鋼をつくるための組織は、アメリカにおいても日本においても似たようなものになりますし、同様に大規模な自動車工場なら、ソ連でつくってもイタリアでつくってもまた似たようなものになります。このように大規模な産業活動はみな似たような形をとってくる、と私は考えております。

そして、このような大規模な組織はその国の文化というものの、たとえば国や人やその地域社会に対して判こを押すものです。これはいわばイデオロギーの線を越えて、はつきりした共通の形に向かっていく傾向があると思います。イデオロギーの差は、何か衝突や対立を好むような一部の人たちとか、人生を簡単なフォーミラーでこつちかあつちかというふうに分けたがる人たちの間のみ残されていくのではないかと、思います。

こういった点については、私の「新産業国家」の中でも触れていますが、この本がソ連でも出版されたというところは私に嬉しく思っております。また、この「新産業国家」で述べた私の議論が、アメリカでもソ連でもイデオロギー的な人たちによって強く批判されたというところを、私は嬉しく思っています。

ちよつと個人的な逸話を申し上げれば、ソ連のある編集者が——ということだけにどめて名前を申し上げないほうがいいと思います——私の本の書評をこつそり抱えてケンブリッジへ訪ねてきてくれたことがあります。かれは、私が述べた官僚組織の取れんぐとということに対しての評論をたくさん持ってきてくれたのです。よく著者というものは自分の本の書評を読まない、などといわれますが、私はちゃんと読んでお

ります。

大量の書評をソ連の編集者に読んでもらったわけです。「ブラウダ」、「イズベスタ」には私の本に対するたいへん批判的な鋭い調子の評がありました。私はロシア語がわかりませんので、大体の見当をつけたと思います、かれに「内容を教えてくれないか」といったところ、「こんな書評は気にすることは無い。こんなことを書く奴はまったくイデオロギー的な、バカな奴で、何も学んだことがないし、したがって何も忘れたことのない人が書いたのだから、気にするな」といつてくれたことがあります。

田端（ジャパン・タイムズ）教授はその著作で、一貫して世界的な軍縮の必要性をかなりのスペースをさいて議論していると思います。それに関連して、カーター政権の軍縮政策についてこのコメントをいただきました。

こういう質問をしますのは、SALT IIが現在最終段階に近づいています。新たなSALTというものも、当然論理的に考えられるわけです。また日本では、たまたま戦時の有事立法というような議論が出ていますので。

ガルブレイス 私は、カーター大統領の軍縮政策にはたいへん敬意を払っています。サイラス・パンス国務長官、ポール・ウォンキ氏等の努力にも尊敬を抱いています。

基本的な問題として、B1爆撃機の生産を中止したとか、中性子爆弾の開発をやめたとか、巨大な原子力空母レヴィアサンの建設をやめるといったようなことについて、私は拍手を送りたいと思います。

長い間たいへんな努力をしてつらい仕事を続け、よ

うやくSALT IIの合意にまでたどり着こうとしていることにも拍手を送りたいと思います。

けさ「ジャパン・タイムズ」でチャーチ上院議員のSALT IIについて重要な発表を読み、たいへんな感銘を受けました。

つねにこういったやり方は、ひとつの進歩、前進であり、これを批判することはむづかしい、と思っております。

しかし、まだ米国が相当大規模に武器を輸出している、ということについては不満を持っています。このような武器輸出はぜひ削減してもらいたいものだと思います。日本を含めどんな国にとりましても、武器をたくさん持ったからといって、決して将来の安全が保障されるものではない、ということこそ是非申し上げたいと思います。

BBCで、私がこの前やりました連続番組の最終版は「グレート・トック・イン」と呼ばれたものです。ヴァーモント州の南にある私の家で撮影されたものです。世界の数多くの指導者が一堂に集まって、週末討議をしたわけです。たとえば、イギリスの労働組合の最高指導者であるジャック・ジョーンズ氏とか、ヒース前首相、同じく英国の閣僚であるシャーリー・ウリアムス氏、「ワシントン・ポスト」のキャスリン・グレナム女史、カナダの科学者サリエール、ラルフ・ダーレンドルフ氏のほか、キッシンジャー前国務長官や、ブレジネフ書記長のアメリカ担当補佐官であるアルバトフ氏、そしてタイの前首相ククリ・ポマーシ氏等が参加いたしました。

この週末の会議で、キッシンジャー氏とアルバトフ氏が核兵器の規制、すなわち、核を中心とする兵器の

拡散について議論をしました。私は議長をやっていたわけではありませんが、ともかくホスト役でありました。私はとかくかれらが小国を見下したような傾向の話をしている、ということに気がつきました。いわばこうした核兵器は、大国が持っているかぎり安全であり、小国はそんなものは持っていないほうがいいのだ、という調子だったのです。そこで私は話に介入せざるを得なくなったわけです。

まだ核を持っていない、拡散の及んでいない小さな国々の人たちの意見も聞こうじゃないか、ということを私は提案しました。そしてタイの前首相ポマージ氏——かれはアジアというよりは世界でも有数のインテリの一人であります——にコメントを求めたところ、拡散についてたいへん役に立つコメントをしてく

目次

創立十周年を迎えて	酒井 新一	1
(新春随想)		
「帝国大学新聞」のころ	殿木 圭一	2
(講演記録)		
「不確実性の時代」を語る		
T・ケネス・ガルブレイス		4
事務局から		8

れたわけですが。かれはいろいろな意見を述べましたが最後に、とても心配そうな表情を顔に浮かべて、「われわれタイ人はまだ核爆弾を持っていない。われわれが持たないわけは、非常にタイ人はそそっかしい人種なので、持っていることによるとポロンと指のあいだから落とすかもしれない。それを心配しているからだ」ということを述べたわけですが。

(文責・編集部)

「産業構造」出版決まる

昨年、シリーズ企画として好評を得た「これからの日本の産業構造」が、日本経済新聞社から日本記者クラブ編として四月に出版されることになりました。

国民一般の間で、将来の産業構造・産業社会に対する関心が高まる中で、会員の中からも、この問題を考えるに当たっての重要な視点、前提をわかり易く解明した手引き書として講演集を出版してはどうか、との声が事務局に寄せられました。クラブの企画委・理事会で検討の結果、クラブの創立10周年にあたる54年の春を目的に出版を進めることが決定しました。

講演集には左記の講師の方がたの講演内容が収録されます。

天谷直弘エネルギー庁長官、並木正吉農業総合研究所所長、下河辺淳国土庁事務次官、竹内宏日本長期信用銀行調査部長、河野力新日鉄総合調査部長、堺屋太一氏、青山浩一郎野村総研企業調査部長、牧野昇三菱総研専務取締役、竹中一雄国民経済研究協会会長。

寄贈書

イギリス人のことばと知恵 朝日イブニング ニュース社

小さな国際人

海外っ子々の喜びと哀しみ

マーガレット・サッチャー

ダウニング街10番地への道 深尾凱子会員

歩き出した女たち

アメリカレポート 古谷綱正会員

私だけの映画史

一月の行事

18日(木)午後5時30分〜7時30分 新年互礼会

員懇親会 クラブ宴会場

会費 二、〇〇〇円

新年あけましておめでとうございます。

本年もよろしくご指導くださるようお願い申し上げます。

恒例の新年会員懇親会は右記の通りです。席上、53年度予想アンケートの結果発表および表彰、ならびに54年度予想アンケートを実施するほか、毎日好評を得ている全員総当たり(空クジなし)の「福引き」を行います。

多数ご出席くださるようお願いいたします。